

Sustainability



インドネシア スラウェシ島 エビ養殖業改善プロジェクト



マングローブの再生

1. プロジェクト概要について

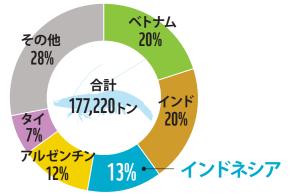
日本で最も人気のある水産物の一つ、エビ。 その主な輸入先は東南アジアの国々で、中でもインドネシアは、輸入量で第3位の13%を占めています。 しかし、このエビ養殖は、沿岸の自然を破壊する主な原因にもなっています。 そこで、2018年7月、WWFはインドネシア・スラウェシ島で、自然環境や生産者・地域社会に配慮したエビ(ブラックタイガー)養殖への転換を目指す、養殖業改善プロジェクトを開始しました。 プロジェクトでは、ASC(水産養殖管理協議会)認証基準を満たす持続可能な水準に到達することを目指した、養殖の改善に取り組みます。 ASC 認証の取得が実現すれば、自然環境や生産者、地域社会に十分に配慮することが第三者によって証明されたエビが、スラウェシ島から日本にやってくることになります。



ASC (Aquaculture Stewardship Council) は、責任 ある養殖業の認証を管理するための独立した国際 的な非営利団体です。WWF と IDH (オランダの持続可能な貿易を推進する団体) の共同出資により 2010 年に設立されました。製品につけられる ASC ラベルは、その水産物が自然環境と社会への悪影響を最小限におさえて育てられたものであることを、消費者に約束するものです。



日本のエビ類国別輸入量(2017年)



財務省「貿易総計」より作成

2. 何が問題か

インドネシアは、世界でも屈指の豊かな自然環境と水産資源を有し、漁業・養殖業が主要な産業として人々の生活を支えている国です。

スラウェシ島にもかつては、マングローブが生い茂り豊かな自然が広がっていました。マングローブは、熱帯から亜熱帯の海辺や河口に広がる森林で、ヒルギ科の植物を中心とした樹種によって構成されています。

この豊かな生態系には、たくさんの野 生生物が暮らしています。プロジェクト 地のスラウェシ島のマングローブには、 ミズオオトカゲをはじめ、アジサシ、コ

サギ、ダイサギなどの鳥類がいます。これらの鳥類は、インドネシア国内のレッドリストに掲載されていて、保護対象種となっています。

しかし、このマングローブの環境は、各地で無計画なエビ養殖場が広く造成され、失われ続けています。また、暴風や高波といった悪天候による被害も、マングローブの減少に伴い深刻化し、地域の人々の生活にも影響を及ぼしています。



ミズオオトカゲ

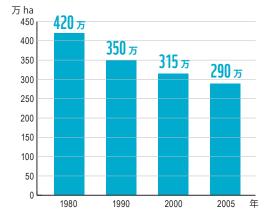


マングローブの役割

林立するヒルギの根が大型の魚類などの侵入を防いでいることから、エビやカニ、貝類などの小動物や魚の卵、稚魚などにとって、安全な生息場所にもなっています。

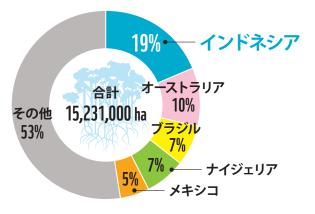
また、陸地と海の間を覆うマングローブは、高潮や強風などの影響を軽減する環境形成にあたり、大きな役割があります。密集しながら広域に根を張ったヒルギが、波や風の力を吸収し、弱める緩衝地帯となるためです。実際、インドネシアでの巨大地震などの折にも、自然のマングローブが残っていた場所では、津波の被害が少なかったという報告もあります。

インドネシアにおけるマングローブ面積の推移



国連食糧農業機関(FAO)「The world's mangroves 1980-2005」より作成

マングローブ面積の国別割合(2005年)



国連食糧農業機関(FAO)「The world's mangroves 1980-2005」より作成

3. プロジェクトに関わる人たち

本プロジェクトは、ASC 認証基準にもとづき、ブ ラックタイガーの生産現場で働くエビ生産者を中心 に、関係者全員が協力して養殖を改善するプロジェ クトです。

ブラックタイガーを通じて、「エビを育てる」、「加 工する」、「売る」、「買う」、「食べる」ところ、すべ てがつながっています。その一連のつながりに関係 する、生産者から消費者まで、すべての人が関わって、 自然環境や生産者・地域社会に配慮したエビ養殖業 を実現することを目指しています。

プロジェクトの中で大事なことは、エビ生産者の意識変革です。この プロジェクトが終わった後も、生産者が自立して、環境に配慮した養殖 に取り組んでもらうことが将来的な目的だからです。生産者自身の意識 が変われば、将来にわたって環境に配慮した養殖が継続されます。

またこの取組みが、今のプロジェクトの対象池だけでなく、地域全体、 さらにはインドネシア全体に広がっていくことも期待できます。

日本の消費者も現地の生産者の意識変革の後押しができます。環境に 配慮して育てられたエビを選ぶことで、インドネシアで積極的に環境に 配慮した養殖を行う支えになります。





エビ生産者を

サポート







消費者との コミュニケーション

日本生協連*

- ●商品の開発・供給
- ●加工業者 (BOMAR) への 持続可能な調達の 働きかけ
- ●資金的な支援をする
- ●消費者・生協組合員との コミュニケーションを すすめる

WWF ジャパン

- ●現地と日本の ステークホルダーへの 的確なインプット
- ●国内向けに情報を 発信する
- ●消費者向けの コミュニケーションを サポートする

WWF インドネシア

- ●プロジェクトの設計および 進捗管理を行う
- ●改善に関する技術的サポート を行う
 - 例) マングローブの再生、労働者への トレーニングなど
- ●現地関係者と連携・ コミュニケーションをはかる

BOMAR 社** (エビ加工会社)

- ●加工業者として事業の 持続可能性を改善する
- ●生産者へ調査機器等を 提供する
- ●現地関係者と 連携・コミュニケーション をはかる



消費者のみなさん

4. 具体的な活動

プロジェクトの目標は、該当する現地のエビ養殖が、自然環境や生産者・地域 社会に配慮した養殖業を認証する、国際的な養殖のエコラベル認証「ASC(水産 養殖管理協議会)認証」を取得することです。



★1月 プロジェクト開始

2017

課題の調査

課題の特定

- ●環境影響評価
- ●社会影響評価

★7月 協働開始

2018

ASC 基準に 基づいた改善

……2 年目スタート

2019

2020

2021

ASC 本審杳

ASC 取得

他の養殖地に ASC が拡大 マングローブの 再生



28.48ha の再生

手順書の 作成



エビ生産者への トレーニング 〈例〉

- ・排水管理
- ・普及啓発 (理解・意欲促進)

養殖池所有者との 協力関係構築



実現したいこと

- ■生態系・生物多様性の保全
- ■中長期的な地域住民の生計確立と持続可能な水産物の生産・消費

日本のエビ消費を支えるインドネシアの養殖業が継続してできるよう、その周辺の生態系や生物多様性 を保全し、そこで働く生産者である地域住民が生計を確立し、自立して養殖業を営んでいくことを目指 しています。

日本が輸入する水産物が持続可能なものに



私たちはWWFです

人と自然が調和して生きられる未来を目指して、地球環境の 悪化をくい止めるさまざまな活動を実践しています。

www.wwf.or.jp

本件に関するお問い合わせ

WWFジャパン (公財) 世界自然保護基金ジャパン 自然保護室 海洋水産グループ fish@wwf.or.jp Tel: 03-3769-1718 東京都港区三田1-4-18 三田国際ビル3階